薪ストーブ、薪ボイラーで

先進地天川村に続け

日々配送の方が出入りしていますが、朝7時頃からみんな食材を積み込んで、10時頃までひっきりなしに出て行っています。帰ってくる人たちに薪ストーブで炊いた汁ものなどを出してあげたいというのが、店長の思いです。今は本当に薪ストーブが大好きで、その前から離れないようです。

拠点ができたおかげで、地域の元気な方たちが集まって、2月に薪割り体験会を「KUBERU」と一緒にしようと予定しています。そこで薪割り体験、丸太切り、薪の即売会をやろうとお誘いを受けています。下市の拠点ができれば、薪の流通ができます。上からも木は下りてきますし、都市部からの買い付けも入ってきます。

ならコープは、組合員にバイオマス利用などの取り組みをされているので、そこに薪の利活用が露出していくと思います。こちらとしてもありがたいお話です。

ーところで、「陽楽の森」について谷さんにお聞きします。

谷　僕の世代で何か自己主張できる、谷林業が社会に向けて発信できるとしたら、都会の王寺の森を何か生かせないかということからです。7年前に「チャイムの鳴る森」というイベントをしたところ、この山に2日間で5000人もの人がやってきました。僕も想定しない出来事が起こったというところがスタートです。王寺町畠田小字陽楽の「小字名」から取りました。

ー今後、どのような展開を考えていますか。

谷　いろんな事例を見てきたので、森と社会をつなげる人間のネットワーク、組織づくりを実現させるために、いろんな人といろんな活動をしようとしています。そうすれば、この分野は脱炭素につながる、社会課題につながることになるのです。一つの最重要部門になるだろうと思います。SDGsを体現するため、煙突があっちこっちに立たないといかんだろうと。山が広がれば、あの山もあの山も全部生き返ります。そういう地域づくりが奈良盆地、四方山に囲まれた奈良からスタートさせたいです。

小島　王寺町は大阪から来られた方も多いと思います。その人たちが「山の木をなんとかしよう」というのは大前提ではあるのですけど、「なぜ使うのか、使ったらどうなるのか」というのを知ってもらえたら、もっと薪を使ってくれる人も増えていくのかなと思います。

ー現状を切り開くのに主力となっているのが、「大和協」ですね。

谷　そうです。この地域に森林組合がなかったので、僕が西和森林組合というのをつくりたかったのです。もともとは西和森林管理協会でしたが、結局、僕と泉先生がやりだして、下北山などから仕事をもらうのです。天川も一部そういう話があって、それで「大和」という名前になりました。

ー「大和協」で新たに挑戦される事というのは。

谷　大きな流れは二つあります。一つは谷林業を資産管理会社に戻すということです。大和協にうちの山を全部預けようと思っています。同じように、山守の恩恵を受けてきたかつての山林投資家が多くいます。川上村は50人ぐらいで2万5000㌶を持っています。

昭和50年代の県下の納税番付の上位にいた山林長者たちが次第に亡くなっていきます。僕らの世代の30歳代、40歳代の後継者が帰ってきて、「どうしていったらいいねん」という時に、大和協がそれを丸抱えしようと思っています。

この時点で5000㌶ぐらいの山はおそらく大和協の管理になると思います。奈良でいうと80分の1ぐらいの面積です。それを価値化させる。かつての吉野がやってきた状況を取り戻したいのです。目指すべき方向はかつての山守制度。コミュニティーベースドフォレストリーのようなものを現在版で作り上げるのが大和協のコンセプトです。

そのためには、山守になっていく若い人たちが食っていく仕組みを作らなければなりません。薪ストーブだって、薪にして売ればその方たちの生活の糧になります。小島さんらが営業に行くことによって、出会う工務店の人や設計士らから、木材の供給の話にもつながる人脈が手に入ります。

二つ目は王寺に住む僕らが陽楽の森を通じて、地域経営の仕組みを自分たちで作っていくことです。その一つのきっかけとして、陽楽の森を動かしてみたいなと考えています。今は福祉法人ではなく、NPOの障害者の就労支援「なないろサーカス団」の方たちの活動場所になったり、大阪の吉川運輸のSDGs部門の子会社となった放課後デイサービスの団体「どすこい」が、日常にこの山で昼から活動しています。それと小島さんの「KUBERU」も。

谷さんの強い思いは「陽楽の森」に詰まっている

ならコープ下市ステーションに設置された薪ストーブと小島さん

今後、セブンイレブンの支援で、木工が始まりそうです。また、トヨタ財団の国内助成プログラムというのがあって、コロナ後のニューノーマルをつくる研究に選ばれています。そういうところに来ました。吉野林業の話と陽楽王寺の地域経営的な視点の2点です。

ー薪ストーブが広がれば、山が良くなる一つのきっかけになるわけですね。値段の方がもっと下がれば。

小島　うちで扱っているのは、設置工事を入れて1台150万円から200万円とかかります。それもやりようによっては価格を下げることはできるんです。

谷　せめて全部で100万円を切らないと広がらない。結局、個人営業でやるので良いものだけど高い。高いから売れない。そういう苦悩があります。こういうことに対する問題も売れていくことで恐らく業務用の原価で300万円ぐらいは落とせるはずだから。そういうことを実現させるというのが「KUBERU」のプロジェクトです。

ー木の活用、都市との連携、若者の働く場所。まとめに、こういった観点から総合的にどう未来に向けて動いていかれるのでしょうか。

小島　奈良県で今、谷さんのところで森林を使っている取り組みというのは、たぶん日本で一番最先端だと思います。それに乗っからせてもらって薪ストーブ、業務用の薪ボイラーの値段を下げたものや、家庭用の薪ボイラーなどを奈良から発信していけたらと思っています。それが出来たら、僕は妻と子どもがいる新潟に戻ろうかなと思います。

谷　今回、「KUBERU」が薪ストーブをまきます。「なないろサーカス団」が薪を割ります。今後来るかもしれない木工家が木工教室を立ち上げたりする。カフェを立ち上げて、森に行く動線をつくろうと思っているのです。このことを建築家、クリエーター、社会学者、泉先生に面倒を見てもらいながら、「陽楽プロジェクト」をとにかくやっていく。成功させることが、今年以降の一つの流れです。

やっぱり地域で衣食住、エネルギーを自給しながら、都市部でも生活できるような流れをこの陽楽プロジェクトを拠点につくっていきます。そして、山間部と都市部との接点をたくさんつくること。都市の人の生活の中に森を入れることを実現させて、その恩恵を吉野の山に持ち帰る。可能であれば、吉野林業のかつての姿をなんとか生きている間に見られたら、やった甲斐はあっただろうなと思います。

来年度中に薪ボイラー２基が導入されることになっている「道の駅御杖・姫石の湯」

森林活用、地域再生へ

奈良版「自伐型林業」へ始動

～谷林業社長の谷さん ＆「KUBERU」の小島さんに聞く～

奈良県土面積は36万9000ヘクタールで、そのうち森林面積は28万4000ヘクタールもある。この「宝の山」をどう生かすかが、経済発展や豊かな自然を次世代につなぐといった明るい未来像の鍵になる。北葛城郡王寺町の谷林業株式会社代表取締役社長谷茂則さん（46）と新潟県五泉市出身で河合町在住の一般社団法人大和森林管理協会（大和協）薪ストーブ事業部「KUBERU」の小島忍さん（47）がタッグを組み、薪ストーブの普及や森の中での子どもの育み、福祉との協働作業など、これからの森林活用と地域再生へのプロジェクトを始動させた。「自伐型林業」＝🔑＝が注目される中、奔走するキーパーソン二人に話を聞いた。

薪ストーブを囲み、森林活用と森林再生でタッグを組む谷林業社長の谷さん㊨と「KUBERU」の小島さん（王寺町で）

―谷林業といえば昔から山主ですが、奈良県の山の現状はどうでしょう。

谷　山主としては大きい方ですが、実態は山守の集合体なのです。僕が林業をやろうと思ったのは、平成19（2007）年からでしょうか。谷林業のために私自身、税理士資格を取りました。吉野林業の成り立ちからしても、林野庁が繰り出す政策では林業の問題は突破できないだろうというのが5、6年前からの私の結論です。

小島さんがやっている「KUBERU」は、平成29（2017）年7月に設立された「大和協」の一プロジェクトなのです。大和協の理事長が愛媛大学副学長だった林学者の泉英二先生なんです。泉先生が吉野林業の最終的な顛（てん）末を書ききり、学説をつくりました。

泉先生から聞く吉野林業の話は、森林の管理を地域住民の参加によって行い、そこで得られる利益などを住民に分配するという「コミュニティー・フォレストリー」だということです。コミュニティーがある上にフォレストリーが成り立ったからです。

―泉さんから聞かれた吉野林業の歴史というのは。

谷　吉野林業だけは、南北朝の流れでコミュニティーを作ったのです。大峰奥駈道という情報ネットワークがあり、南北朝の優秀な落ち武者がいて、平等なコミュニティーがあった。そのコミュニティーが安定してきたところに、土木技術が発達して筏（いかだ）の輸送路を吉野川に開設して、都市需要に自分らの裏山の天然木を送り出したわけですね。物流と情報を全部しつつ、閉じ込められた中で自分らの成し遂げたかったことを、違う形で成し遂げた物語だと僕は思います。

―二人がやろうとしているイノベーションはどういうことですか。

自伐型林業　採算性と環境保全を高い次元で両立する持続的森林経営。参入障壁が非常に低く、幅広い就労を実現するため「地方創生の鍵」として期待されている。奈良3区選出の田野瀬太道衆院議員（自民党）が「自伐型林業普及推進議員連盟」事務局長を務めている。

谷　「自伐型林業」という取り組みがありまして、その自伐型林業を推進するNPO法人があります。6年ぐらい前に立ち上がり、1周年記念のシンポジウムをしたのですが、その時に千葉県の社会福祉法人が林業をやりだすというのです。

特別養護老人ホームに薪ボイラーを入れて、障害者福祉で薪割りをやるんです。荒れた山の問題、障害者の就労場所がない問題、ホーム内での入浴問題を解決するため、薪ボイラーで代替するという着眼点でプロジェクトを始めたのです。その薪ボイラーに興味を持ったことが、薪ボイラー会社の営業部長だった小島さんとの接点でした。

小島　薪ボイラーの会社では、開発から20年ぐらい携わってきたんですけど、たまたま谷さんの事務所にいた時に、泉先生もおられたというタイミングで、その会社を辞める決心をしたのです。それで、1カ月ぐらい重点営業したら売れるかもしれないということになりました。

―天川村の天の川温泉に薪ボイラーが入ってますね。

小島　そうです。日本全国で結構、薪ボイラーが使われるようになりました。今で120台ぐらい出てるのかな。その中でも天川村の取り組みは非常に先進的で、意欲的なのです。とにかく山の材を使い、お金を外に出さないという取り組みです。村の中に油屋さんが2軒あり、そこが年間の指定管理契約の中に予算として取り込まれているのです。

村の森林政策課長が一生懸命になられて、フォレストパワー協議会というものをつくりました。そこで村民から原木を5000円で買い入れて、温泉側に1万円で買ってもらう仕組みを作ってくれたのです。

―最近の動きとして、「道の駅御杖・姫石の湯」へ薪ボイラー導入が決まったようですが。

小島　4年越しの話になるのですが、御杖村の担当課長の理解を得られたのです。今は実施設計までたどり着いて、来年度末までに2台導入される予定だということです。

それの最終的な判断のところで参考になったのが、やはり天川村の事例。フォレストパワー協議会までつくって、薪のきちんとしたものを安定的に作れる場所も。森林組合に頼るんじゃなくて、自分たちで燃料を作って、それを薪にしていく事例があったので、それを見て最終的に判断されました。また、チップではなくて薪ボイラーでいく、というところも地の利を生かしたところなのかな、と思います。

―それと、ならコープの下市ステーションに薪ストーブを設置されましたが。

小島　ならコープの関連団体である財団法人再エネ協同基金で地域のエネルギーを活用する、エネルギーを生み出そうという取り組みをされています。ならコープで食材は配達しているんですけど、それだけじゃなくて、地域の人たちやお年寄りの拠り所を作ろうというのを、ならコープが思っていたんです。

下市町長にもその思いがあり、南都銀行が出られるということで、町長がそこを提供するということになりました。ならコープに提供すれば、再生可能エネルギーの導入も進みます。今、ソーラーも設置しています。森林の利活用ということで、薪を燃料として循環させるために作られたのです。